



科学は神を殺したか

アリスター・マクグラス

要旨

本論は、リチャード・ドーキンスらがしたような自然科学の極度な無神論的見方を検討し、それが、知的信憑性の点でも実証的論拠の点でも、非常に問題を含むことを指摘する。かつて科学を一般の人々に普及させた功労者の彼は、今や、非常に多くの科学者が信仰を持っているという明らかな事実を無視して、宗教を論駁するための最も粗雑な手段として科学を用いている。彼は単なる反宗教的宣伝家になってしまったのだろうか。ドーキンスの無神論はいわば知的マジックテープで科学に貼り付けられたようなもので、科学的方法の提唱者に期待される厳密な証拠を欠いている。

私はかつて、無神論者だった。1960年代にベルファストで育ったのだが、その間に、神は子供だましの幻想に過ぎず、年寄りや頭の弱い人や宗教的詐欺師のような人々のためのものだと思えるようになっていた。私は、これがいささか横柄な考え方であったということを心から認め、今ではいささか恥ずかしく思う。しかしこれが、横柄な見方であったとしたら、それは、これが多かれ少なかれ当時の知的傾向だったからである。宗教は退場しようとしており、輝かしい無神論の時代が、まさに幕をあげようとしていた。——少なくとも、そのように感じられていたのである。私が無神論の結論に達したのは、一つに、自然科学にもとづく論考の結果であった。高校時代、私は数学と科学に特に力を入れていた。オックスフォード大学に進学して化学を専攻するためである。様々な科学を学びたいと私が望んだそもそものきっかけは、それらが与えてくれるすばらしい自然界への洞察であったが、私は、また、それらが、私の宗教批判への非常に都合な味方であるとも思っていた。無神論と自然科学は最高に厳密な知的絆で相互に結びついているように思われた。そのような状態のまま、1971年の10月、私はオックスフォードに到着した。

化学は、そして次に分子生物学が、私を知的に心躍らせるものとなった。自然の複雑な世界がますます整合性のあるものを感じられてきて、私はしばしば、無我夢中になった。自然科学へのこの高まる喜びは、望みうる何をも超えるものだった。しかし、その一方で、私は、自分の無神論を見直すようになっていた。自分の思想の核となる信条を批判的に見ることは誰にとってもたやすいことではない。それでも私がそうしたのは、物ごと自分がかつて思っていたほど単純明快ではないということに、ますます気づいてきたからである。私がいみじくも「信仰の危機」とも言えそうなことは、多くの要素が結びついて起こった。

私は、無神論が十分に実証された証拠にもとづいていないことに気づき始めた。かつては、明白で決定的で異論の余地のないものに見えた議論が、堂々巡りで暫定的で不確かであることが分かった。キリスト教の信仰についてキリスト教徒の人々と話す機会は、私がキリスト教について比較的わずかしら知らないことを明らかにした。キリスト教についての私の知識は、主に、パートランド・ラッセルやカール・マルクスなどキリスト教に対する主な批判家の書いたものを通して得られており、彼らの描写は必ずしも正確ではなかったからである。おそらくより重要なことに、私は、科学と無神論が自動的に揺らがぬ絆で結びついているとの自分の想定が、やや単純で無知すぎると気がついたのである。



著者紹介 (Alister McGrath)

マクグラス教授は、オックスフォード大学歴史神学教授であり、オックスフォード、ハリスマンチェスターカレッジのシニアリサーチフェローでもある。組織神学の研究者となる前は、化学者としてオックスフォードで分子生物学の研究をしていた。科学と宗教について著書多数。中でも、*Dawkin's God: Genes, Memes and the Meaning of Life* (Blackwell, 2004) と *The Dawkins Delusion? Atheist fundamentalism and the denial of the divine* (SPCK, 2007) (邦訳『神は妄想か?—無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』杉岡良彦訳(教文館, 20012)) はベストセラーとなった。

キリスト教に入信してから私が解決しなければならなかった最重要事項の一つは、その絆を系統だって解いてゆくことであった。私は、自然科学をキリスト教的視点から見ようとした。そして、なぜ他の人たちがこの視点を共有しないのかを理解しようとした。

1977年に、依然として分子生物学を研究している時、私はリチャード・ドーキンスの最初の本を読んだ。その前年に出版された『利己的な遺伝子』(*The Selfish Gene*) である。これは、魅力的な本で、着想にあふれており、難解な概念を言葉で表現する秀でた能力を見せていた。私は夢中で読み、彼の著書をもっと読みたいと望んだ。しかしその一方で、私は、驚くほど皮相的に思えた彼の無神論には当惑した。それは、十分な科学的議論にもとづいておらず、いわば知的マジックテープで彼の生物学に付けられたようなもので、ドーキンスが集めた科学的証拠が要求するものではなかった。

ドーキンスは今や、英国の無神論層の代弁者として、揺らがぬ存在である。1960年代後期にはオックスフォードの優秀な若き動物学者だった彼は、徐々に宗教、特にキリスト教に対する最もあからさまな批判家に変質した。彼の著書はすべてのキリスト教護教家にとって彼を敵とするに値するだけ優れており、彼の文章の不快感と攻撃性は、彼を敵にせずにはいられなくするのである。

本論で、私は、科学と宗教の問題についてドーキンスの取り組みに根本的な懸念を表明したい。私は、ドーキンスの著書にあまりにも特徴的な、自然科学と無神論の結びつきに、異議を唱える。ドーキンスの科学を批判することは私の意図ではない。それは、結局、科学者の学会全体の責任に属することだからである。むしろ、私の目的は、ドーキンスが時に前提とし、時に弁護しようとしている科学的方法と無神論の結びつきを検討することである。

以下で私は、キリスト教に対する彼の無神論的批判の最も重要な要素を要約し、それに簡潔に答えたい。その短さに不満を感じる読者の方には、私が『ドーキンスの神』(Dawkins' God)という本の形で、もっとずっと詳しくドーキンスの考えを解説し、彼の無神論的世界観への私の詳細な批判も表していることをお知らせしたい。もっとずっと詳細な議論をお読みになりたい方は、その本をお読みいただくとよいだろう。¹

1. 科学は神を排除した

ドーキンスの考えでは、科学、特にダーウィンの進化論は、神を信じることを不可能にした。ダーウィンの前は、世界を神の設計によるものと考えられることはできたが、ダーウィンの後は、ただ「設計の幻想」が見えるだけである、とドーキンスは論じている。ダーウィンの世界には目的がなく、そうではないと考えるなら、それは、自分を欺いているのである。宇宙を「善い」と描写することができなくとも、少なくとも、宇宙は「悪」であると表現することもできない。ドーキンスが論じるには、「われわれの観察する宇宙は、根底に何の設計も何の目的も何の善も悪もないとすればこうであったろう、とわれわれが予期するまさにそのような属性を持っていた。それは、盲目の無慈悲な無関心さに他ならない。²

ここで、ドーキンスはダーウィニズムを一つの生物学の理論というよりむしろ一つの世界観と見ている。彼は躊躇なく、ダーウィンの議論を、純粋な生物学的領域をはるかに超えて理解している。ダーウィン自身は、あるいは、科学全般も、何ら無神論を信じるように促していない。そして、ドーキンスにとって厄介な問題がここから生じるのである。ドーキンスは、確かに、生物の過去や現在の状況について目下知られていることは純粋に自然科学的に叙述しようということを論証した。けれども**なぜ**、そのことが神は存在しないという結論に結びつくのか？

科学的方法は、神-仮説について、神がいるともいないとも、判決を下すことはできないということは、よく知られていることだ。科学が神の存在や非存在を証明すると信じる者は、科学的方法をその合法的限界以上に推し進めているのであり、科学的方法を濫用したり、その信憑性を失わせる危険を冒しているのである。秀でた生物学者の中には(たとえば、人ゲノムプロジェクト長のフランシス・S・コリンズなど)自然科学が信仰の積極的な根拠を生み出すと論じている人もいる。また、(進化論生物学者のステイヴン・ジェイ・グールドのように)自然科学は有神論に対して否定的な意味を持つと論じる人もいる。けれども、彼らは何も**証明**してはいない。神についての問題を解決しようとするなら、それは、他の土壌で解決しなければならない。

これは、新しい考えではない。実際、科学的方法の宗教的限界は、ダーウィン自身の時代にもよく理解されていた。そのことは、「ダーウィンの番犬」と呼ばれたダーウィンの擁護者、T. H. ハクスリーの著述に明らかに述べられている。けれども、この問題については、近年重要な議論がなされている。一つ例を見よう。

1992年に書かれた『科学的アメリカ』所収の論文で、当時アメリカの進化論生物学者の第一人者だったステイヴン・ジェイ・グールドは、科学は合法的な方法では、神の存在について裁定することはできないと主張した。³ グールドにとって、進化論生物学者には無神論者も有神論者もいるということは、目に見える事実だった—彼は、人道主義不可知論者G.G. シンプソンやロシア正教のキリスト教徒テオドシウス・ドブジャンスキーを例に挙げている。ここから、彼は、「私の同僚の半数がとんでもないおろか者であるか、さもなければ、科学とダーウィニズムが無神論と完全に両立しようと同じくらい宗教的信仰とも両立しうるのか、どちらかである、との結論に達した。

今、ドーキンスは、ダーウィニズムを無神論への知的最短距離として示している。実際のところ、ドーキンスが描く知的軌道は、不可知論のわだちにはまり込んでしまうようだ。そして、そこで足止めを食い、そのまま動けない。ダーウィニズムと無神論の間に

は、かなりの論理的ギャップがあり、それをドーキンスは証拠ではなくレトリックでつなげようとしている。もし、確かな結論に達したいのなら、他の論拠によるのでなければならない。そして、そうではないと言いつけたいのなら、その説明をせねばならない。

2. 信仰は証明と取り組むことを避けている

ドーキンスによれば、キリスト教は信仰にもとづいており、それは、厳密な証拠にもとづいた真理への関心からの撤退の典型的例である。ほとんど退屈なほどドーキンスの著書に繰り返されている彼の信念の核の一つは、信仰とは「証拠にもとづかぬ、あるいは、証拠に反してさえいる、盲目の信頼である」というものだ。⁴ ドーキンスは、信仰は「一種の精神病」であり、「天然痘のウィルスにも匹敵する世界最大の悪の一つであるが、天然痘ウィルスよりも根絶しがたい」と論じる。けれども、問題はドーキンスが言うほど単純だろうか。私も、自分が無神論者だった時にはそう思っていたし、その時なら、ドーキンスの議論が、決定的だと思ったであろう。⁵ けれども、今はそう思わない。

信仰とは「証拠にもとづかぬ、あるいは、証拠に反してさえいる、盲目の信頼である」と、ドーキンスは言う。

彼の信仰の定義をまず、考えてみよう。これはどこから来ているのだろうか。信仰とは「証拠にもとづかぬ、あるいは、証拠に反してさえいる、盲目の信頼を意味する」。けれども、いったい誰がこのようなこっけいな定義を受け入れる必要があるか？ 信仰を持つ人がこのように信仰を定義しているという証拠は何か？ ドーキンスはこの点では控えめで、宗教的著述家の誰にもこの非常に信憑性の低い定義を裏づけてもらおうとはしていない。この定義は、宗教的信仰を知的道化に見せようとの意識的な意図をもって考えられたものに見える。私はこのような宗教の見方は受け入れられないし、信仰をもつ知性人でこれをまじめに取っている人に会ったことがない。これは、どの教派のキリスト教のいかなる公式宣言によっても擁護されえない。これはドーキンスが自分の論点を念頭に、自分が批判したい相手の特徴を現しているかのように見せようと、自己流に作った定義である。

真に憂慮すべきは、ドーキンスが本当に、信仰が実際「盲目の信頼」だと信じているように見えることだ。主なキリスト教の著述家でそのような定義を採択している者など、一人もいないという事実にも関わらずに、である。これは、ドーキンスの核となる信念で、宗教や宗教人に対する彼の態度のすべての面を多かれ少なかれ規定している。けれども、核となる信念が問い直されるべきことはしばしばある。というのも、ドーキンスがかつて、ウィリアム・ペイリーの設計の考えについて述べたように、この信念は「輝かしくまた徹底的に過っている」からである。

信仰とは「証拠にもとづかぬ、あるいは、証拠に反してさえいる、盲目の信頼である」と、ドーキンスは言う。ドーキンスはこう考えているかもしれない。けれども、キリスト教徒はこうは考えない。W.H. グリフィストマス(1861-1924)が出した定義は、長いキリスト教伝統のなかで典型的なものである。⁶

[信仰]とは、人の性質すべてに影響を及ぼすものである。それは、十分な証拠にもとづき頭で確信することに始まり、意思の同意を与えられ、そのことによって、確信と信頼が行動で表現されるのである。

これは、良い、信頼のできる定義であり、典型的なキリスト教的信仰理解の核となる要素を統合している。読者の方は、この表現がはっきりと、十分な証拠にもとづき頭で確信することに「始まり」と言っていることに気づいていただきたい。この点を裏づけるために、何代ものキリスト教著述家の引用を連ねて読者の方をうんざりさせる必要はないだろう。いずれにしろ、ドーキンスのゆがんだ無意味な「信仰」の定義がキリスト教の特徴だと、証拠だてて議論で示す説明責任はドーキンス自身にある。

ドーキンスは、わら人形を立ててそれを倒して見せているだけだ。

それは、あまり難しくもなく、あまり高度な知的業績でもない。信仰は子どもっぽい—とわれわれは聞かされる—印象を受けやすい幼い子どもの心に詰め込むには良いが、おとなの場合には、途方もなく非道で知的にはお笑いものだ。われわれはもうおとなになったのだから、先に進まなければならない。われわれは、科学的に証明できないものをなぜ信じなければならないのか？ 神を信じるのは、サンタクロースや歯の妖精[抜けた乳歯を枕の下に入れておくと、代わりにお金を置いておいてくれるというおとぎの妖精]を信じるようなものだ、おとなになれば卒業するべきだとドーキンスは論じる。

これは、おとなの議論に偶然迷い込んだ学童レベルの議論だ。素人っぽく、説得力がない。人々が、神とサンタクロースと歯の妖精を同じカテゴリーで信じているというまともな実証的証拠はない。私は、6歳ごろでサンタクロースと歯の妖精を信じなくなった。しばらくの間無神論者だった後、18歳の時神を発見し、一度としてそれを子どもじみた退行だと考えたことはない。私が最近出版した『無神論のたそがれ』(The Twilight of Atheism)のための調査をして気づいたことだが、多くの人は人生の後期になって、つまり、おとなになってから、神を信じるようになっていく。私は、まだ、年を取ってからサンタクロースや歯の妖精を信じるようになった人に会ったことはない。

ドーキンスのいささか単純な議論にいくらかでも信憑性があると言いたいならば、神とサンタクロースの間に真の類比的関係がなければならないが、明らかに、そのような関係はない。人々が神への信仰をサンタクロースを信じる子どもの気持ちとは異なる範疇で考えていることは、誰でも知っている。ドーキンスは、もちろん、どちらも非-存在の実体に対する信仰の代表的例であると論じている。けれども、これは、どちらが議論の結論であり、どちらが議論の前提であるかについての非常に初歩的な混乱の代表的例である。

ドーキンスが、歯の妖精の類であるとして退けた信仰が、彼自身の宇宙の、いや、実際、彼の科学的営み自体の知的遺産を支えるその同じ信仰であることは、非常に皮肉なことだ。と言うのも、生物科学の出現におけるキリスト教徒自然哲学者たちの役割は十分立証されているからだ。

ドーキンスの無神論のもうひとつの顕著な面は、彼が無神論を不可避と主張するその確信である。これは、奇妙な確信であり、科学の哲学に通じている者には奇妙に場違い—いや常軌を逸してさえている。1965年に量子電気力学の研究でノーベル物理学賞を受賞したリチャード・フェイマン(1918-88)がしばしば指摘したように、科学的知識は様々な程度の確からしさの陳述の集まりであって、それらの陳述は非常に不確かなものから、ほぼ確かなものまでであるが、絶対的に確かなものなどない。

3. 神は精神を蝕むウイルスである

神という概念は有害で、もともと健全な精神に感染し蝕む侵略的感染症である。ドーキンスの鍵となるこの議論は、神を信じる信仰は理性的、あるいは実証的根拠からは生まれえないということだ。それは、コンピューターに感染するウイルスに比することのできるような感染性の侵略的ウイルスに感染した結果である。⁷ 神を信じる信仰は、純粋な精神を汚染する有害な感染症であるというのだ。これは、実証的な根拠が驚くほど希薄であるのにも関わらず、影響力の強いイメージとなっている。この考えは、実際は、実験的証拠がまったくないために座礁してしまうのにも関わらずである。

諸観念がウイルスのようであるとか、ウイルスのように広がるということにはまったく観察にもとづく証拠がなく、そのことは、考察を要する決定的重要事項であるのにもかかわらず、ドーキンスは驚くほど気楽にやり過ぎしている。ある種のウイルスは「良く」、ある種のウイルスは「悪い」、と言うのは意味がない。宿主と寄生虫の関係の場合、これは、単にダーウィニズムの進化が働いて

いる例に過ぎない。これは良くも悪くもない。ただ、そういうものだ、ということに過ぎない。もし概念というものがウイルスにたとえられるなら、それらは「良い」とか「悪い」と言えるものではなく、「正しい」とか「過っている」とさえも言えない。これは、単に、すべての概念はひとえにそれらが自己複製し伝播することに成功するか否か—つまり、それが広まるか、生存し続けるか—によって評価されるとの結論になるだろう。

自然科学は無神論的にも有神論的にも解釈できるが、どちらをも要求しない

そしてまた、もしすべての概念がウイルスならば、そのことは科学的根拠によって無神論と有神論とを区別することが不可能であることの証明となる。それらの伝達的手段として考えられているメカニズムは、それらの知的、道徳的長所を評価する余地を残さない。有神論も無神論も科学的証拠からの必然ではない。ただ、どちらも、科学的証拠に適合しうる。有神論や無神論の長所は、他の根拠で判断されるべきものである。そして、神がいる、いないの結論に達するには、科学的方法の限界を超えることが必要である。

けれども、仮定された「心のウイルス」にはいかなる実験的証拠があるのだろうか？ 現実世界では、ウイルスは単にそれが引き起こす症状のみから知られているのではない。ウイルスは、発見し、実験による厳密な調査をして、その遺伝子的構成の特徴を詳細に述べることができる。それと対照的に、「心のウイルス」は、疑わしい類比的議論で立てられた仮説である。直接に観察されたのではなく、ドーキンスが言うような振る舞いを根拠としては概念的にまったく確かとは言えない。われわれはそうしたウイルスを観察できるだろうか？ それらの構造はどうなっているのか？ 心のウイルスの「遺伝子コード」は？ それらは人間の体のどこに位置するのか？ そして、繁殖というドーキンスの関心からして最も重要なこととして、それらはいかにして伝達されるのか？ われわれは、問題を大きく三つの項目に要約できよう。

1. 本物のウイルスは見ることができると—たとえば、低温電子顕微鏡を用いて。ドーキンスの文化的あるいは宗教的ウイルスは、単に仮説に過ぎない。その存在には何も観察された証拠はない。
2. 観念がウイルスであるという実証的証拠は皆無である。観念はある意味であたかもウイルスのように振舞う。けれども、類比があるということと同一であることとのあいだには大きな開きがある。—そして、科学の歴史があまりに痛ましく例証するように、科学の誤った道筋はほとんど、同一と類比を間違えるところからきている。
3. 「ウイルスとしての神」スローガンは、無神論—実証的に実証的証拠を超えたもう一つの世界観—にうってつけだ。ドーキンスはもちろんこのことを認めようとせず、無神論を科学的方法からの不可避かつ適切な結論と考えている。けれども、そうではないのだ。自然科学は無神論的にも有神論的にも解釈できるが、どちらをも要求しない。

4. 宗教は悪いものだ

最後に、ドーキンスの著書に一貫して見られる核心的信念を見よう。一宗教はそれ自体悪いものであり、他の悪いものに通じるとの信念である。明らかにこれは、知的判断であると同時に道徳的判断でもある。一部には、ドーキンスは、宗教がいかなる思考の義務をも避けている信仰に基づくものだからと言う理由で宗教を悪だと考える。しかしわれわれは、これが証拠に照らしてはとて受け入れることができない非常に怪しい見方であることをすでに見た。

道徳的点は、もちろん、はるかに深刻である。宗教的人々のなかにはいくらか、非常に不穏なことをする者がいることは誰でも認めるであろう。けれども、その「いくらか」という小さな一語が、ドーキンスの議論に入るや否や効力を弱めてしまっている。というのは、

「いくらか」と言えば、すぐに、一連の批判的な問いを問わざるを得なくなるからである。いくらか、とはどれくらいか？ どういう状況でか？ どれほどの頻度でか？ また、これは、他との比較における問いも問わざるを得なくさせる。反宗教的見方をする人の何人が、やはり、非常に不穏なことをするのだろうか。そして、いったんそうした問いを発すれば、われわれは、知的対戦相手に安っぽい安易な狙撃を行なうのをやめて、人間の本性の暗く厄介な側面に向かわざるを得なくなる。

ジークムント・フロイトに従って宗教を一種の病理学的現象と見ることは一時は流行であったが、この見方は、多くの形の宗教が実際よい影響をもたらすと(決定的ではないが)示唆する実証的証拠が増えてゆくに従って、後退してきている。確かに、病理学的で破壊的な形の宗教もある。しかし、有益に見える形の宗教もある。もちろん、これを証拠に神が存在すると結論することはできない。けれども、これは、ドーキンスの無神論的聖戦の大黒柱—宗教はあなたにとって有害である—を覆すことはできない。

2001年に行われた、宗教と人間の幸福の関係を系統的に調べるための100件の証拠に基づく研究を検討した結果、以下のことが明らかになった。⁸

- 79件が宗教への参加と幸福の間に少なくとも1つの肯定的な相関関係を報告している。
- 13件が宗教と幸福の間に何も意味のある結びつきを見出さなかった。
- 7件が宗教と幸福に混合した、つまり複雑な結びつきを見出している。
- 1件が、宗教と幸福に否定的な結びつきを見出している。

ドーキンスの世界観はすべて、宗教と幸福との否定的な結びつきにかかっているのだが、この否定的な結びつきをはっきりと承認しているのは、実験結果のわずか1%だけであり、79%がそれと同じくらいこの結びつきをはっきりと否定しているのである。

この結果は、少なくともひとつのことを十分に明白にしている。つまり、われわれはこの問題については、個人的偏見によってではなく科学的証拠に照らして取り組まねばならないということである。私はこの証拠が、信仰を持つことはあなたにとってよいと明白に証明していると示唆しようとは夢にも思わない。ましてや、これが神の存在を立証しているとは論じようと思わない。けれども、これがドーキンスにとっては深刻に厄介な結果であるということをはっきりさせる必要がある。彼の世界観は、信仰はあなたにとって有害であるとの前提を核として形成されており、その見方は、この証拠のもとでは保持しがたいからである。

宗教は有害だろうか？ どこにその証拠がある？ これは、今、一筋の煙のように空気中に残っているが、徐々に、反対の証拠によってかき消されてきている。

ドーキンスにとって、問題は単純である。つまり、問題は、「あなたが健康や真実を尊重するかどうか」と言うことなのだ。宗教は誤っている—これは彼の著書のいたるところに繰り返し出てくる核心的信念のひとつである—信じることは、どのような益があるとしても、非道徳的である。けれども、神への信仰は誤って

いるというドーキンスの議論は、実際つじつまが合わない。それはおそらく、彼が、宗教は有害であるという議論を加えて議論を補っているからである。宗教が実際に人間の幸福を増進していることを示す証拠がますます増えていることは、この点で彼にとっては非常に都合が悪い。これは、無神論を支持する働きをする批判的な議論を覆すだけでなく、無神論の真実性について非常に厄介な問いを生じるからである。

結論

この小論で、私は、リチャード・ドーキンスが宗教全般、特にキリスト教に向けた主たる批判に触れた。ドーキンスの議論も、それに対する私の応答も網羅的に論じることはできなかったが、この短い概論でも、問題がいかなるものか読者の方が理解する一助となったと思う。私の結論は単純で、私の信じるどころ、議論の余地がない。ドーキンスは、科学的方法を不当に引き伸ばすことなしには、自然科学が無神論に通じるとは論じることができない。これは科学界で重みを持つ議論とはなりえない。これを、何年か前ノーベル医学賞を受賞したピーター・メダワー卿の考えと比較していただきたい。すなわち、「科学に限界が存在することは、科学が最初と最後の事柄に関わる子どもの発するような基本的な問いに答えることができないことで明らかだ。それはたとえば、『なぜわれわれはみなここにいるのか？』『生きる意味は何か？』などの問いである。」⁹ 科学的知恵の初めは、しかるべき認識と敬意を持ってその限界を認めることである。

真実は、自然科学は知的に柔軟であり、有神論的にも、不可知論的にも、無神論的にも解釈を許すということである。無神論と有神論の大論争は、自然科学によっては解決されていないし、解決されえないのである。ドーキンスは、自然界を「読む」一つの仕方を代表する。私が何年も昔に発見し、今も知的に健全で精神的には豊かにしてくれると考えている見方は、「天は神の栄光を物語る」(詩編19:1)というものである。

注

1. McGrath, A.E. *Dawkins' God: Genes, Memes and the Meaning of Life*, Oxford: Blackwell (2004).
2. Dawkins, R. *River out of Eden: A Darwinian View of Life*, London: Phoenix (1995), p.133.
3. Gould, S.J. 'Impeaching a Self-Appointed Judge', *Scientific American* (1992) 267(1), 118-21.
4. Dawkins, R. *The Selfish Gene*, 2nd edn., Oxford: Oxford University Press (1989), p. 198.
5. たとえば、McGrath, A. *The Twilight of Atheism*, London: Rider (2004).
6. Koenig, H.G., and Thoreson, W. H. *The Principles of Theology*, London: Longmans, Green & Co (1930), p. xviii.
7. Dawkins, R. *A Devil's Chaplain*, London: Weidenfield & Nicolson (2003), p. 121.
8. Koenig, H.G., and Cohen, H.J. *The Link between Religion and Health: Psychoneuroimmunology and the Faith Factor*, Oxford: Oxford University Press (2001), p. 101. この非常に重要な点について関連のある文献としては、以下のものがある。Miller, W. R., and Thoreson, C.E. 'Spirituality, Religion and Health: An Emerging Research Field', *American Psychologist* (2003) 58, 24-35; Galanter, M. *Spirituality and the Healthy Mind: Science, Therapy, and the Need for Personal Meaning*, Oxford: Oxford University Press (2005).
9. Medawar, P. *Advice to a Young Scientist*, London, Harper and Row (1979), p. 31; *The Limits of Science*, Oxford: Oxford University Press (1984), p. 66.

(本論は Alister Macgrath, "Has Science Killed God?" (Faraday Paper 9, April 2007)の全文訳である。)

「ファラデー論集」(The Faraday Paper)

「ファラデー論集」はファラデー科学・宗教研究所(Faraday Institute for Science and Religion)を出版者とする。当研究所は St Edmund's College, Cambridge, CB3 0BN, UK に本部を置く教育と研究のための慈善団体(www.faraday-institute.org)である。また、本論文集の日本語訳は本多峰子による。「ファラデー論集」に表明された意見は各著者の意見であり、必ずしも本研究所の意見を代弁しているとは限らない。「ファラデー論集」は、科学と宗教の相互作用に関する幅広い論題に取り組んでいる。現在出版されている「ファラデー論集」のリストは www.faraday-institute.org で閲覧可能であり、そこから、PDF ファイルでダウンロード出来る。

出版:2013年6月© The Faraday Institute for Science and Religion